

< 2020年9月 >

古賀 順子

「COVID-19 コロナウイルスと共生」

9月に入りフランスの新学期が始まった。

コロナウイルスに季節性はないことが証明され、依然として感染は拡大の方向にある。

教室内のソーシャル・ディスタンスが緩和され、マスク着用で通常授業が始まった。遅ればせながら、外出時のマスク着用が義務付けられた。半年前はマスクは何の役にも立たないとしていたフランス政府も、マスク着用の有効性を認めた。半年かかったが、フランス人にもようやくマスクが定着し始めた。

9月10日カステック新首相のテレビ発表が行われた。7月末からPCR検査が処方箋なしで無料で受けられるようになり、新規感染者数がどんどん増えている。予約なしで無料検査を行うラボには朝早くから長蛇の列で、2-3時間待ちだ。検査が増えれば当然感染者数も増える。13日には24時間の新規感染者数が1万人を超えた。一週間の検査実施数が100万を超えるようになった結果だ。

検査・隔離・検査を繰り返し感染拡大を防ぐ体制は整ったが、24時間体制で処理してもラボの検査結果が追いつかない。感染初期が決め手である。無制限にテストを実施することに批判の声も上がり、カステック首相は1)熱や咳などの症状がある人、2)感染者と接触があった人、3)医療関係者に優先権を与えることにした。

また、PCR検査結果で陽性の場合、14日の自宅隔離を7日に短縮することも発表された。COVID-19感染研究が進み、感染のリスクが高い初期段階の隔離が肝心であるとした。経済的な観点からも7日の欠勤は痛手ではあるが、14日に比べれば対応し易いことも大きな理由である。

落ち込んだ経済をいかに立て直すかはフランスにとっても大問題だ。9月中旬で42の県が赤ゾーン(ウイルスが活発に感染拡大を続けている地域)となり、すでに学級閉鎖となったところも出ている。パリと首都圏、

マルセイユ、ボルドーが特に心配されているが、再びロックダウンは経済的に無理で、一人一人の責任と高齢者を守る連帯意識で感染防止に努めることを強調している。

半年かかって受入れられたマスク着用、手洗いや衛生観念の見直し、コロナウイルスと共生せざるを得ないことをフランス人もようやく納得し始めている。風土のせいもあるだろうが、日本人に比べればフランス人は手洗いもうがいは入浴も圧倒的に回数が少ない。もうすぐ風邪やインフルエンザの季節がやってくる。コロナウイルスとの共生本番が始まる。

コロナ禍と直接の関係はないが、「パリ通信」で紹介させていただいているル・コルビュジエ船が日本建築設計学会の所有となった。持ち主だったフランスの会社が法的解散となり、会社の資産として残った船が競売にかけられた。パリ商業裁判所で解散の判決が下りたのが5月末。2018年2月セヌ川増水で沈没して2年以上が過ぎていた。コロナ禍で裁判所も大きな遅れが続いていた。例年セヌ川水位が低く安定する5月から10月一杯に浮上させる必要があり、清算人の尽力で例外的なスピード競売が実現した。8月4日日本建築設計学会が落札し、異議申し立てもなく8月末に確定した。

第一次世界大戦中、パリに石炭を運ぶコンクリート船として誕生。第一次大戦後はフランス救世軍の「アジュール・フロタン(浮かぶ避難所)」として多くのホームレスを受け容れてきた。船の劣化と時代の変遷で、浮かぶ避難所から浮かぶ博物館に生まれ変わろうとしていた矢先の沈没事故だった。誕生から100年の歴史を生きた船を日本が救うことができれば本当に素晴らしいことだ。今ようやくその目処が立ち、10月上旬から浮上工事に入り、10月末には再浮上できる予定である。2年8ヶ月沈んだままの引船に新たな使命が与えられる日が見えてきた。無事に浮上して欲しいと祈っている。昨年末から黄色いベストのデモ、交通機関のストライキ、年金改正反対デモ、そしてコロナウイルス対策のロックダウン。厳しい年が続いているが、船が浮上すれば未来への灯となる。